# ‘The Subject of Denotation’[1]
## ——ラッセル 1905 年の「指示」概念についての一考察——

稲岡　栄次

### はじめに——本稿の目的

1905 年 10 月イギリスの哲学雑誌『マインド』に載った論文「指示について On Denoting[2]」（以下、OD と略記）で B・ラッセルは「指示句 denoting phrase」に関して或る解釈を施した（「指示の理論 theory of denoting」、「記述の理論 theory of descriptions」[3]）。本稿の目的は、この論文（OD）でラッセルが提示した「指示 denoting」（及び「指示対象 denotation」）という概念の解明にある。

なお、一点だけ予め断っておく。指示句のなかには幾つか種類があり、それぞれ指示の様態に差異がある——「現在のイギリス王 the present King of England」のような指示句は特定の人物を指示するが、「或る人 a man」のような指示句がする指示の仕方は曖昧である、等々。だが、本稿では、指示のこの手のヴァリエーションにも拘らず、指示句が指示句として果たす指示の一般的な特性のほうに関心が向いている。かくして以下の論述は、或る点において、件の論文（OD）の解説が当然持ち合わせるべき詳細さを欠くだろうが、そこはご容赦願いたい。

### 1. 二つのテクスト——『数学の原理』（1903 年）と「指示について」（1905 年）

OD 発表以前の 1903 年、ラッセルは『数学の原理 *The Principles of Mathematics*』（以下、POM と略記）を上梓した。POM と OD は、どちらにも「指示句 denoting phrase」についての彼の解釈が示されており、記述の理論の解説にあたっても OD とセットで POM が言及されるケースがある[4]。記述の理論全般を解説するというのは筆者の手に余る仕事で、本稿では目標とすべくもないが、そうはいっても POM に全然目配せしないわけにもいかない。私たちが POM に注目するのは、ラッセルが 1905 年に OD で決着を付けた或る問題を、その始めの形態において、POM で確認することができるからである。

指示句に纏わる二つの解釈の相違や変化については様々に指摘が可能だが[5]、まず、どこにフォー

---

[1] タイトルにしたフレーズは、Russell, B., “On Denoting”, in: *Mind*, New Series, Vol. 14, p. 493 から取った。

[2] ‘denoting’に充てられる訳語としては「表示」もあるが、本稿では「指示」を採用した.

[3] 「指示の理論 theory of denoting」(OD, pp. 480, 491, 492)。一方、「記述の理論 theory of descriptions」という言い方は OD の中では出て来ないが、「記述 description」(OD, p. 479)という語が一度出てくる。

[4] 特に飯田隆(『言語哲学大全 I　論理と言語』、勁草書房、1987 年)及び戸田山和久(「Ⅲ　ラッセル」、飯田隆編、『哲学の歴史　第 11 巻　論理・数学・言語　【20 世紀Ⅱ】』、中央公論新社、2007 年、197-276 頁)。三浦俊彦(『ラッセルのパラドックス——世界を読み換える哲学——』、岩波書店、2005 年)も僅かながら言及している。

[5] ラッセルは、(1)OD では「私はこの主題〔the subject of denoting〕を『数学の原理』第 5 章及び 476 節で論じたことがある。そこで主張した理論はフレーゲの理論と殆ど同じで、以下で主張する理論とは全く異なる」(OD, p. 480, note 1)と言っており、(2)POM 第 2 版のイントロダクションでは「『原理』の第 4 章に『或る文の中に出てくる語の各々は何か或る意味を持たなければならない』、また、『何であれ思考の対象でありうるもの、真または偽の命題の中に出てきうるもの、一 *one* と数えられうるものを私は項 *term* と呼ぶ。……或る人も、或る瞬間も、或る数も、或るクラスも、或る関係も、或るキマイラも、その他言及されうるものは何でも、項であることは確かだ。そして、これこれの或るものが項であるということを否定することは常に偽とならざるをえな

カスして POM と OD を比較するかを定めておく必要がある。そういった比較の観点を提示するために、ラッセルが『私の哲学の発展 *My Philosophical Development*』（以下、MPD と略記）に書き記している回想に目を向けたい。少し長くなるが、二つ続けて引用する。

> 新しい哲学の発展の初めの時期、私は主として言語に関わる問題に専心していた。私は複合体の統一、特に文の統一をもたらすのは何であるかに関心を寄せた。文と語のあいだの違いが私を混乱させた。文の統一が、文が動詞を含むという事実によることは分かったが、しかし私には、その動詞が、これに対応する動名詞とまさに同じものを意味するように思われた。ところが動名詞はもはや複合体の諸部分を結びつける力を持たないのだ。*is* と *being* のあいだの違いに私は悩んだ。……時が経つにつれて、私はそのような問題に悩まされなくなった。それらの問題は、もしある語が何かを意味するなら、その語が意味する何か或るモノがなければならないという信念から生じたものだった。1905 年に到達した記述の理論は、これが誤りであったことを示し、他のやり方では解くことができなかった多くの問題を一掃した。(MPD, chap. 5, p. 63)

また、

> 私が文について悩み始めたのは『数学の原理』を書いていた時だった。当時特に私の関心を引いたのは動詞の機能だった。その際重要だと思われたのは、動詞が文に統一を与えるということだった。「A は B より大きい A is greater than B」という文は、幾つかの語を含むから、複合的である。そして私は、もしこの文が真であるなら、この文を真とする事実のうちに、対応する複合がなければならないということは明白だと思ったし、今もそう思う。この種の複合的な統一に加えて、文はもう一つ、真と偽の二元性という特性を持っている。この二つの理由により、文の意義の説明が孕んでいる問題は、対象語が孕んでいる問題よりも困難かつ重要である。(MPD, chap. 13, p. 150)

注目すべき点が二つある。(1)『数学の原理』でのラッセルの主要な関心事は――言語に関する事柄に限るが――「動詞の機能 function of verbs」の問題だった。(2)問題を解決した記述の理論は「指示について On Denoting」というタイトルの論文として発表された。以上の二点だ。

POM では、動詞についての議論(POM, chap. 4, §52 ff.)と指示及び指示句についての議論(POM, chap. 5)はさしあたり別個の問題とされている。OD の比較対象として POM 第 5 章(「指示 Denoting」

---

い』とあるが、この言語理解の仕方は誤りであることが判明した。或る語が『何か或る意味を持たなければならない』――その語は、勿論、チンプンカンプンな語ではなく、理解可能な使い方を持つ語である――ということは、単独の語 the word in isolation に当て嵌まると取るなら、常に真ではない。真であるのは、語は、それが出てくる文の意味に寄与するということである」(POM, p. x)と言っている。松坂陽一(「フレーゲの Gedanke とラッセルの Proposition――“On Denoting”の意義について」、野本和幸編、『科学哲学の展開 1　分析哲学の誕生　フレーゲ・ラッセル』、勁草書房、2008 年、257-76 頁)は(1)の方面に、戸田山(上掲書、220-1 頁)は(2)の方面に主に着眼し、前者は「“Gray's elegy argument”」を中心に、後者は「不完全記号の発見」を中心にそれぞれ議論、記述している。

と題する)は目を引き易い。一方、第 4 章(「固有名、形容詞、動詞 Proper Names, Adjectives and Verbs」)特に動詞関連の節はどうだろうか[6]。しかし OD では、「リダクション[7]」によって指示句が「文全体に散らばってしまった[8]」のだから、「指示」がどういう機能か、またその機能を担うのは何かに関する既存の解釈（POM での解釈）も一旦御破算になったと看るのは自然であろう。「指示」概念をめぐる OD の主題は当然「指示句の意味に関する問題だ」と言ってよいが、同時に「命題の意味に関する問題だ」と言ってもよい。しかし POM では、文を文たらしめる動詞の機能を論じるなかで、こうした命題の意味の問題が浮上するのだ。

こうした事情に鑑みて私たちは POM の§§52, 54 をクローズアップしたい。§§52, 54 は、当時のラッセルが「動詞 verb」と「動名詞 verbal noun」の違いに対して抱いた戸惑いをよく表している。問題は、1903 年の時点では避けられなかったその戸惑いを 1905 年の発見がどう解消していったかであるが、とにかく POM の§§52, 54 を見てみよう。

## 2. POM, 1903——動詞の二つの機能と、命題の真偽及び統一

POM でラッセルは動詞に二つの論理的な機能を認めた。次の一文がそれを一番コンパクトに表現している。

> 或る命題の中の真の論理的な動詞は常に或る関係を主張していると看做しうる。(POM, §53)

動詞の二つの機能は、(1)命題の中の複数の項を「関係づけること relating」と、(2)その関係を「主張すること asserting」だ。

§52 は(2)の機能を、§54 は(1)の機能を明らかにした節だ。

ただし§§52, 54 は動詞の論理的な機能を明らかにする他に、それと関連して或る事実を述べている。その事実とは、命題中の動詞をそれに対応する動名詞に変えると、この動名詞はもとの動詞が果たしていた機能を失ってしまうと見え、もとの命題は或る変質を蒙るという事実である。

§§52, 54 でラッセルが何を述べているか実際に見てみよう。

### 2.1.1. POM, §52

> $P_1$ : “Caesar died”.

という命題を考えよう。さて、この命題において何が主張されているのか。その答えは、

---

[6] 飯田(上掲書、157 頁)は「動詞によって指示される類の概念は、文の統一性という問題との関連で、『数学の原理』第 1 部で重要な役割を果たしているが、表示の問題に関して重要なのは、むしろ、述語あるいはクラス概念と呼ばれる概念の方である」とする。これは、あくまでも POM に内在的に「表示の問題」を論じる場合には全く正しい（クラス概念（例 : man）に“all”, “every”, “any”, “a”, “some”, “the”がくっ付くと指示句（“a man”）が出来あがる(cf. POM, §58)）。

[7] Cf. OD, p. 482: 「以上〔指示の理論〕は、指示句が出てくる命題を全て、その種の句が出てこない形式へとリダクションする手続きを与える」。

[8] この巧みな表現は、戸田山(上掲書、220 頁)から借用した。

$P_2$ : “The death of Caesar is asserted”.

という命題になる。$P_2$ の“death”は $P_1$ の“died”の名詞化で、或る命題（$P_1$）を別の命題（$P_2$）の主語にした格好だ。述部を取り替えれば、$P_2$ 以外にも $P_1$ を主語にした様々な命題があるだろう。しかし、$P_2$ において顕著なことに、主語“the death of Caesar”は命題（$P_1$ : “Caesar died.”）が持っていた或る特性――「主張 assertion」・「真または偽 true or false」――を欠いている。$P_2$ においては“is asserted”という述部を続けることで初めて“the death of Caesar”に主張という要素が付加される[9]。つまり「the death of Caesar は真または偽に対して外的関係を持つ」一方「“Caesar died”は或る仕方で、または他の仕方でそれ自身の真または偽を或る要素として含む」わけだ。よって「動詞によって与えられる、主張という根本的な観念があるように思われる。それは、私たちが〔動詞の代わりに〕動名詞を用いると途端に失われ、よって、当の命題が他の命題の論理的な主語にされると失われる」。

### 2.1.2. POM, § 54

動詞のもう一つの機能は「関係づけること relating」だ。これは、動名詞によって表現される「関係それ自身 relation in itself」とは異なる。

$P_3$ : “*A* differs from *B*”.

という例で考えよう。この命題は「*A*, difference, *B*」という三つの構成要素（関係づけられる二項と関係それ自身）へと分析できそうに思うが、この三つは「命題〔$P_3$〕を再構成しない」。「命題〔$P_3$〕の中に出てくる difference〔“differs from”として表現される〕は実際に *A* と *B* を関係づける」、一方、「分析後の difference は、*A* 及び *B* と何の結びつきも持たない或る観念である」。そこでもし三要素を再び関係づけたければ、$P_3$ が *A* と *B* を関係づけたのに対して、*A* と difference と *B* を関係づける命題が別に必要である。そこで、

$P_4$ : “*A* is different from *B*”.

と言えば、その際に「*A* が言及されていて、*B* は difference に関して〔*A* に〕関係づけられる *A* is referent and *B* relatum with respect to difference」という事実により、$P_4$ は *A* と difference と *B* を関係づける当の命題と看られる。しかしもし $P_4$ に、$P_3$ に施したのと同様の分析を施すなら、「*A*, referent, difference, relatum, *B*」は再び「項のリストにすぎず、命題ではない」。よって、関係それ自身ではなく、複数の項を実際関係づける動詞の機能がなければ、いかなる命題もないように思われる。「或る命題は、事実、本質的に或る統一であり、もし分析がこの統一を破壊してしまうなら、構成要素を枚挙しても、それは当の命題を復元しないだろう。動詞は、或る動詞として使われる場合、命題の統一を具現するのであり、こうして或る項として考察される動詞と区別しうる」。

---

[9] 勿論、だからといって、$P_1$ と $P_2$ において同じことが肯定されているわけではない。

### 2.2. 困った帰結——関係は個物ではない？

以上、§§52, 54 のあらましを述べた。関係づけ、主張するという動詞の機能ないし本性があり、それと関連して命題はその統一と真または偽という特性を持つ。しかしラッセルは自分が導き出したこの帰結を持て余しており、このことを率直に言い表している。

> かくして、論理的な主語にされえない存在者があるという矛盾、避けられるべきだった矛盾が、ここで不可避的になってしまうように思われる。この困難はまさに真および偽の本性そのものに内在するように思われる。それは、私がどうやって満足のゆくように処理したらよいか分からない困難のうちの一つである。(POM, §52)

また、

> しかしその区別〔動詞と動名詞の区別〕の正確な本性の明晰な説明をどうやって与えたらよいか、私は分からない。(POM, §54)

§§52, 54 によると「実際の動詞 actual verb」によって表現されるものと「動名詞 verbal noun」によって表現されるものは機能の点で全く別物のように思われる。これは、実際の動詞によって指示される「論理的な主語にされえない存在者 an entity which cannot be made a logical subject」があるという証拠になるとも思われる。この事実はラッセルの目にどう処理してよいか分からない「困難 difficulty」と映った。

この当惑の背景には、POM でラッセルがとっている多元的な存在論(cf. POM, §47)との兼ね合いという問題がある。「概念 concept」も概念でない「モノ thing」も、「何であれ思考の対象でありうるもの、真または偽の命題の中に出てきうるもの、一 *one* と数えられうるもの」を引っ括めて「項 term」と呼び、「単位 unit」・「個物 individual」・「存在者 entity」として扱うのがこの存在論の特徴である。つまり項は一般に「通常実体 substances や実詞 substantives[10]に割り当てられている特性を全て持つ」とされる。「論理的な主語」・「不変にして不滅」・「自己自身との数的同一性」及び「他の全ての項との数的差異性」——以上がその特性である。ラッセルは、「項」として指示される存在者の「単一性と多数性」を積極的に認めることで「一元論を破壊」しようとしたのである。

さて、「困難」に話を戻そう。問題は、動詞が、その機能を検討した結果、論理的な主語となりえそうもないという点にある。ラッセルはこれを「避けられるべきだった矛盾 contradiction」と言った。概念を指している語を——モノを指している固有名と全く同様にではないにせよ[11]——或る命題の中で論理的な主語とすることができる[12]ということは、そうした語が指している項（概念）がその

---

[10] 名詞及び名詞類。

[11] Cf. POM, §48: 「ソクラテスはモノである。なぜなら、ソクラテスは命題中に項としてしか出てこない。つまり、ソクラテスは、*human* と *humanity* に含まれているような特徴——奇異なことだが二つの使われ方をするという特徴——を持ちえない」。なお、「項として as a term」とは、「主語 subject」として、「それについて命題がある about which the proposition is」ようなものとして、という意味でラッセルが使っている表現である。

[12] Cf. POM, §49. この節ではラッセルは或る論証——いまその詳細は割愛するが——を試み、その帰結として「或る命題の中の主語でない *A* と、別の命題の中の主語である *A* は、厳密にまた数的に同じである」と確言し

「自存性 self-subsistence」に関して、他の種類の項（モノ）と比較し、何一つ劣らないという主張の論拠である。しかし動詞――それが、或る命題の中で或る関係を主張すべきであるならば――に関しては、それが成り立たない[13]。この事実は、命題の中に出てきうるもの（モノでも概念でも）を何であれ項つまり単位・個物・存在者としたラッセルの存在論的主張に何らかの形で見直しを迫るかに見える。少なくとも動詞によって指示されると考えられた概念つまり「関係 relation」[14]が提起した問題に関しては更なる検討を要しよう。

ラッセルの回想によれば、動詞の解釈に纏わる上の問題を解決したのは「1905 年に到達した記述の理論」だった。では、実際どのように解決されたか。次はこの点を確認したい。というわけで、ようやっと舞台を POM から OD へ移すとしよう。

### * 補足――「避けられるべきだった矛盾」はなぜ生じたか

OD に移る前に、補足として、POM の動詞解釈が「避けられるべきだった矛盾」に陥った理由に関して若干敷衍しておく。

まず始めに、本節で確認したことを整理しておこう。POM の§§52, 54 で判明した事実は、要約すると、次のとおりである――動詞によって指示される項は、それを論理的な主語として、また、それだけを単独で取り上げて思考の対象にすると、或る命題の中で当の動詞が実際に行使している（と思われる）力を失ってしまう。この事実にラッセルは或る困難を感じた。動詞と動名詞の区別が必要であるように思われるが、それはつまり、命題の中の或る概念――動詞によって指示される存在者――は、それ自身の同一性を破壊する（自己矛盾をきたす）ことなしには論理的な主語となりえないということに等しい。このことは、動詞によって指示される概念を「項」と呼ばれる正規の存在者と看做しうるかどうかを疑わしくするように思われる。

さて、この困難の根は結局どこにあったのか。一言で言えば、動詞のものでない機能や本性を動詞に押しつけたのが原因だ。ラッセルは、一方で、動詞が動名詞の形で「関係 relation」を表し、他方で、動詞としての動詞が命題に対して「主張の観念 notion of assertion」を与え、複数の項を「実際に関係づける actually relating」機能を持つとし、「動詞の二重の本性 the twofold nature of the verb」があると考えた。しかしそれは、ラッセルが 1905 年に到達した地点から振り返って観れば、動詞に大きな負担を掛けた解釈だ。かくして、或る命題が他の命題の論理的な主語になると無くなるものがあると推論する結果になって、「避けられるべきだった矛盾」が生じてしまう。

---

ている。例えば“this is one”という命題の述語である“one”と、“1 is a number”という命題の主語である“1”は、その現れ方は違うが、数的に同じ概念だ。

[13] 問題はあくまでも動詞の二つの機能に言及するときに生じる。語の意味だけに着目するなら、“this is one”と“1 is a number”のあいだに成り立つのと同じことが“Felton killed Buckingham”と“killing no murder”のあいだにも成り立ちそうだ。

[14] POM における項（存在者）の分類に関しては§48 を参照されたし。「項のうちで、私が特にモノ *things* と概念 *concepts* と呼ぶ二つの種類を区別することが可能だ。前者は固有名によって指示される項であり、後者はその他の全ての語によって指示される項である。……また、概念のうちで少なくとも二つの種類が区別されなければならない。すなわち、形容詞によって指示される概念と、動詞によって指示される概念だ。前者の種類の概念はしばしば述語あるいはクラス概念と呼ばれる。一方、後者は常に、あるいは殆ど常に関係である」。

矛盾を招くにも拘わらず、どうしてラッセルは「動詞の二重の本性」を考えたのか。これには更なる理由がある。それは、POM の命題分析方法である。ラッセルは「私たちが命題に対して施す哲学的分析の正しさは、命題を表現している文の中の一々の語の意味を指定することができるかどうかによって確認できるだろう」(POM, §46)と言う。POM の命題分析方法は、文中の一々の語の意味を解明しようというものだ[15]。この方法論から、命題のエレメントやエッセンスと思われるもの——命題の真偽及び統一——をどの語の意味に求めるかという問題が生じてくるのは理解し易いことである。ラッセルはその語を動詞と見たのだが、その結果§§52, 54 で壁にぶつかってしまったのだ。

## 3. OD, 1905——命題の意味と「指示」概念

では、動詞の解釈に纏わる上述の問題を OD が実際にどう解決したか確認してゆこう。

### 3.1. 指示句の作り方

まず始めに注目したいのは OD の書き出しである。

> 「指示句 denoting phrase」ということで私が意味しているのは、以下に挙げる句のいずれか一つに類する句である——「或る人 a man」、「誰か或る人 some man」、「いずれかの人 any man」、「各々の人 every man」、「全ての人々 all men」、「現在のイギリス王 the present King of England」、「現在のフランス王 the present King of France」、「20 世紀最初の瞬間の太陽系の質量中心 the centre of mass of the Solar System at the first instant of the twentieth century」、「太陽の周りを回る地球の回転 the revolution of the earth round the sun」、「地球の周りを回る太陽の回転 the revolution of the sun round the earth」。(OD, p. 479)

ラッセルが列挙している指示句を一つ一つ見ていくと、動詞由来の句が二つ混じっていることに気づく。そう、“revolution”を含んだ二つの句だ。

OD での動詞或いは指示句のこのような取り扱い方は POM のそれと好対照を成している。POM でラッセルは「指示 denoting」を、形容詞を特徴づける性質と考えていた[16]。一方 OD では動詞と形

[15] この方法の前提には、「いかなる語も、それ自体で意味をもち、文の意味である命題は、それを表現している文を構成する語の意味から成る複合物である」(飯田、上掲書、155 頁)というモチーフがある。これは、多元的存在論に基づいて個物（項）から複合体（命題）を再構成しようというラッセルの野心的な試みだと言えよう。三浦（上掲書、175 頁）の指摘によれば、POM のこのモチーフは「指示表現単位を変えてそのまま二十年後の論理的原子論にまで、さらには生涯生き延びている」。

[16] Cf. POM, §46: 「形容詞は指示——私はこのタームを、第 5 章で論じられるテクニカルな意味で使おうと思う——という能力によって特徴づけられる。動詞は真および偽との或る特殊な結合——これに定義を与えるのは非常に難しいが——によって特徴づけられ、その点に関して動詞は、主張される命題を主張されない命題から、例えば、“Caesar died”を“the death of Caesar”から区別するのである」。§57: 「指示という観念は主語 - 述語〔文法的には形容詞。例：“Socrates is human”の“human”〕命題からの或る種の論理的発生によって得られよう。よって、指示という観念は多かれ少なかれ主語 - 述語命題に依存しているように思われる。……主語 - 述語型の命題は常に、個物が或るクラス〔与えられた述語をもつ全ての項の総和あるいは連言〕に属することを主張する他の命題〔例：“Socrates is a man”〕を含み、かつこれに含まれる」。§58: 「日常生活で恒に出てく

容詞を区別することなく、どちらもまず一括して指示句と看做して話を始めるのである。

指示句の取り扱い方のこのような変化の裏にある理由は何か。それに関しては、OD の指示の理論をテストするために取り上げられた三つ目のパズル[17]に対して解決を与えるパッセージの中でラッセルがはっきりと述べている。

> もし「*a*R*b*」が「*a* は *b* に対して関係 R を持つ」を表すなら、*a*R*b* が真である場合、*a* と *b* のあいだの関係 R のような或る存在者がある。一方 *a*R*b* が偽である場合、そのような存在者はない。かくしてどんな命題からでも私たちは或る指示句を作ることができる。指示句は、もし当の命題が真であるなら、或る存在者を指示するが、もし当の命題が偽であるなら、或る存在者を指示することはない。例えば、地球が太陽の周りを回転するということは真であり（少なくとも、私たちはそう仮定しよう）、太陽が地球の周りを回転するということは偽である。ここから「太陽の周りを回る地球の回転」は或る存在者を指示するが、「地球の周りを回る太陽の回転」は或る存在者を指示しはしない。(OD, pp. 490-1)

ラッセルは「どんな命題からでも私たちは或る指示句を作ることができる」と述べている。こうして OD での指示句解釈の問題は、POM とは違って、品詞（特に形容詞）解釈への依存関係を断ち切って命題解釈へと接合してゆくのである。

### 3.2. 命題の分析と指示対象

こうして POM の§§52, 54 での動詞の解釈の問題は、OD では指示句とその基にある命題の解釈の問題へと場所を移すことになる。では、「指示句 denoting phrase」及び「命題 proposition」について OD でラッセルは何と述べているか。以下、最も基本的な点を確認しておこう。

#### 3.2.1. 命題とは何か

始めは「命題 proposition」に関して。指示の理論を提示した箇所(OD, pp. 480-2)の一等始めでラッセルは次のように述べている。

> 私の理論は、簡潔に言えば、次のとおりである。私は変項 *variable* という観念を基礎的なもの

---

る六つの語は、数学の特徴を示すものでもある。その六つの語とは、all, every, any, a, some, the である。……指示句 denoting phrase は常に或るクラス概念に上記の六つの語の一つ、またはその一つの何か或る同義語を前置することで構成されると言うことができる」。

[17] Cf. OD, p. 485: 「命題『A は B と異なる A differs from B』を考えよ。もしこの命題が真であるなら、A と B のあいだの違いがある there is a difference between A and B のであり、この事実は『A と B のあいだの違いが成り立つ the difference between A and B subsists』という形で表現されよう。しかしもし A は B と異なるというのが偽であるなら、A と B のあいだの違いはない there is no difference between A and B のであって、この事実は『A と B のあいだの違いは成り立たない the difference between A and B does not subsist』という形で表現されよう。しかしどうして非 - 存在者 non-entity が命題の主語でありうるのか。……もし A と B が異ならないなら、『A と B のあいだの違い the difference between A and B』のような対象があると仮定することも、ないと仮定することも等しく不可能であるように思われる」。

と看做す。私は、$x$ を一つの構成要素とする或る命題[18]を意味するのに“C($x$)”を使う。その際 $x$ つまり変項は本質的にまた完全に未規定である。そこで私たちは「C($x$)は常に真である」と「C($x$)は時に真である」の二つの観念を考えることができる[19]。そこで *everything* と *nothing* と *something*（指示句のうち最も原始的なもの）は次のように解釈できよう——

C(everything)は「C($x$)は常に真である」を意味し、

C(nothing)は「『C($x$)は偽である』は常に真である」を意味し、

C(something)は「『C($x$)は偽である』が常に真であるというのは偽である」を意味する[20]。

命題の基本的な形式は、(1)まず始めに変項 $x$、(2)(1)を含む命題関数、(3)(2)を含む観念から成っている。また“everything”, “nothing”, “something”（原始的な三つの指示句）は(3)の観念の種類の違いを表す。実際に当て嵌めてみよう。

$P_5$ : “I met a man”.

「私は或る人に会った」。

ラッセルは $P_5$ を上記の三要素に解体し、

“‘I met $x$, and $x$ is human’ is not always false”.

「『私は $x$ に会った、かつ $x$ は人間である』は常に偽ではない」。

と書き直す。これは、$P_5$ が、(1)変項 $x$、(2)関数“I met $x$, and $x$ is human”、(3)観念“C($x$) is sometimes true”[21]から成ることを表す。

### 3.2.2. POM, §§52, 54 の解決

ここに POM, §§52, 54 の解決（ないし解消）がある。

POM の §52 で「動詞によって与えられる」とラッセルが考えた「主張の観念」は、指示句が出てくる命題の基本的な要素である観念——「C($x$)は常に真である」と「C($x$)は時に真である」——として命題のサイドに回収された。

では、件の観念を抜き去られた動詞をラッセルはどう扱うか。動詞は命題関数の一部だ（例 : “I met $x$”）。POM の §54 で「関係それ自身」（例 : “difference”）と「実際に関係づける関係」（例 : “*A* differs

---

[18] 「より厳密に言えば、或る命題関数 a propositional function」(OD, p. 480, note 2)。

[19] Cf. MPD, chap. 7, pp. 81-2: 「或る命題関数に関してなされうることが二つある。一つは、それは常に真であると主張することであり、もう一つは、それは時に真であると主張することである」。

[20] 原文は以下のとおり——

“C(everything) means ‘C($x$) is always true’;

C(nothing) means ‘“C($x$) is false” is always true’;

C(something) means ‘It is false that “C($x$) is false” is always true’”.

[21] Cf. OD, p. 480, note 4. 「C($x$)は常に偽ではない」・「C($x$)は時に真である」・「『C($x$)は偽である』が常に真であるというのは偽である」——“C($x$) is not always false”, “C($x$) is sometimes true”, “It is false that ‘C($x$) is false’ is always true”——は全て同じことを意味する。

from *B*”）——「動詞の二重の本性」——を考えたのに対し、今度は関数（変更を含んだ関係）を基本的な単位と看做し、そこに動詞を位置づける格好になる。

さらに言うなら、POM の § 52 でラッセルが動詞を動名詞（命題の論理的な主語）に変えるという操作を試みたのに対し、OD では動名詞を動詞に変えるという逆向きの操作（リダクション）を旨としている[22]。

以上三つの方針で OD は POM の § § 52, 54 で起きた問題を避けた、と言える。

### 3.2.3. 指示句と指示対象

さて、命題が以上のように解釈されるとき、「指示句 denoting phrase」と「指示対象 denotation」の関係はどのように説明されるのか。この点に関してラッセルは、

> $P_6$ : “Scott was the author of *Waverley*”.
> 「スコットは『ウェイヴァリー』の著者であった」。

を分析しながら述べている。$P_5$ と同様にして $P_6$ を解体すると、

> “It is not always false of *x* that *x* wrote *Waverley*, that it is always true of *y* that if *y* wrote *Waverley* *y* is identical with *x*, and that Scott is identical with *x*”.
> 「*x* は『ウェイヴァリー』を書いた、もし *y* が『ウェイヴァリー』を書いたなら *y* は *x* と同一であるということは *y* について常に真である、かつ、スコットは *x* と同一である、以上のことは *x* に関して常に偽ではない」。

となる。さて、指示句に関するラッセルの説明は次のとおり。

> もし「C」が指示句なら、「*x* は C と同一である」という〔そういう形式の〕命題を上でしたように解釈するとして、存在者 *x*、つまりそれに対して「*x* は C と同一である」という〔そういう形式の〕命題が真であるような存在者 *x* が一つある（一つより多くはありえない）ということが起こりうる。その場合に私たちは、その存在者 *x* が句「C」の指示対象であると言うことができる。かくして、スコットは「『ウェイヴァリー』の著者」の指示対象なのである。(OD, p. 488)

しかし「句『C』の指示対象」であり、そして「それに対して『*x* は C と同一である』という〔そういう形式の〕命題が真である」という、その「存在者 *x*」とは何か。存在者 *x* が変項 *x* と同じでないのは確かだが——指示句が出てくる命題は全て変項を含もうが、しかしこの種の命題が全て真であるわけではない——しかし OD では、これ以上はつっ込んだ説明がない。しかし指示句と指示対

[22] Cf. MPD, chap. 14, p. 160: 「私は、動名詞が動詞と同じ意味を持ち、しかし文の主語でありうるという事実に関心を惹かれていた——例えば、“killing no murder”がそうだ。〔しかし〕私は、そのような陳述は、無意味でない場合、動詞が動詞として現れ、名詞として現れない文の省略であると考えるようになった」。

象のあいだの関係こそが「指示 denoting」であり、私たちが解明したいと思ったのは「指示」概念である。本稿の目的のために、指示句の指示対象に関してもう少し情報を収集したい。

## 3.3. 真理の定義と指示の問題

### 3.3.1. 真理の定義

目下の「存在者 $x$」をめぐる問題は、「真理 truth」の定義に関わる。この点に関しては MPD の第 15 章に詳しい。その章から重要なセンテンスを幾つか拾おう。

真理に関するラッセルの理論は「基本的に或る対応説 correspondence theory」(MPD, chap. 15, p. 189)である。

> 一元論を捨てたその瞬間から、私は、真理は事実 fact に対する何か或る種類の関係によって定義されるべきだということを疑わなかった。しかし厳密に言ってそれがどんな関係であるべきかは、当該の真理の性格に依存せざるをえない。(MPD, chap. 15, p. 175)

「文 sentence」は「命題 proposition」の表現であり、命題の背後に「信念 belief」があると考えるなら、「或る信念は、それが一つ、あるいはより多くの事実 fact に対して或る適切な関係を持つ場合に『真』であり、そのような関係を持たない場合は偽である」(MPD, chap. 15, p. 183)。

信念を言い表す陳述を真たらしめる事実をラッセルは「検証者 verifier」(MPD, chap. 15, p. 185)と呼ぶ。先に OD で見た「存在者 $x$」は「$x$ は C と同一である」を真たらしめる検証者と看て良いだろう。

よって、図式的に整理するとこうなる。一方の側に信念や命題や文がある。他方の側に事実があり、信念・命題・文を真たらしめる。指示句は命題を表現する文に属し、指示対象はその命題を真たらしめる事実に属する。では、指示句が指示対象を「指示する」というときの指示はどうだろう。それは、信念と事実の関係を何か或る仕方で取り持つように思われるが、それがどんな関係であるかは依然として明らかでない。

### 3.3.2. 何も指示しない指示句

しかし指示の関係が単純な対応の関係でないということは明らかだ。ラッセルは「何も指示しない指示句[23]」を認めている。この節の始め（3.1）に取り上げた「地球の周りを回る太陽の回転 the revolution of the sun round the earth」もその一つだ。この指示句が作られる基になる命題は偽であり、この指示句は「或る存在者を指示しはしない does not denote an entity」(OD, pp. 490-1)。これを見る限りでは、「指示しない」は「対応しない」と言い換えても良さそうに思う。しかしラッセル

[23] Cf. OD, pp. 490: 「〔指示句の〕一次的出現と二次的出現の区別はまた、現在のフランス王は禿であるか禿でないかという問題、そしてまた一般に、何も指示しない指示句 denoting phrases that denote nothing の論理的ステータスを私たちが処理すのを可能にしもする」, 491: 『円い四角』、『2 以外の偶数の素数』、『アポロン』、『ハムレット』等々の非 - 存在者の領域の全体をいまや満足の行く仕方で処理できる。これらは全て何も指示しない指示句 denoting phrases which do not denote anything である」。

はそれが依然として「指示句 denoting phrase」であることを否定しない。またラッセルは「現在のフランス王 the present King of France」という句を例に取って、「或る句は指示しているが、しかし何も指示しないことがありうる a phrase may be denoting, and yet not denote anything」(OD, p. 479) とも言う。これらの句は、その「指示対象 denotation」となる「存在者 entity」がなくても「指示 denoting」をする。マイノングの「黄金の山[24]」も、はたまた「零クラス」も必要ない(OD, p. 491)。指示対象を持つか持たないかは指示句にとっては偶発的な差異に過ぎない[25]。指示句はこの手の差異に拘わらず「ただその形式において指示している denoting solely in virtue of its *form*」(OD, p. 479) のである。

### 3.3.3. フランス王は賢いか？

指示の関係にとって、指示句と指示対象の対応があることがイレレバントである、ときに邪魔でさえあるということは、「フランス王 the King of France」を主語とする命題に関してのラッセルとストローソンの見解の齟齬からも看て取れる。ストローソンの見解は、

> いま実際に誰か或る人が真剣な様子であなたに「フランス王は賢い the King of France is wise」と言うとしよう。あなたは「それは真実でない」と言うだろうか。……彼の陳述が真であるか偽であるかという問題は全く生じない。なぜなら、フランス王というような人はいないからだ。……彼の陳述に関して私たちが（当然言うべきとおり）「フランス王はいない」と言うとき、フランス王は賢いという陳述を私たちが否認していると言われるべきでないのは確かである。私たちが、それは偽であると言っていないのは確かである。むしろ私たちは、それが真であるか偽であるかという問題は全く生じないと言うための或る理由を与えているのである[26]。

一方、ラッセルは、

> もし「C」が指示句で、「性質 F を持つ項」だとするなら、その場合、
> 「C は性質 $\phi$ を持つ」は「唯一の項が性質 F を持ち、かつその項が性質 $\phi$ を持つ」を意味する。もしいま性質 F がどの項にも属さないか、または数個の項に属するなら、「C は性質 $\phi$ を持つ」は $\phi$ の全ての値に対して偽であるということが帰結する。かくして「現在のフランス王は禿である the present King of France is bald」が偽であるのは確かである。(OD, p. 490)

---

[24] Cf. MPD, chap. 7, p. 84.

[25] Cf. OD, p. 484: 「私たちは、指示対象が一目見て不在である場合に或る指示対象を用意しなければならないか、指示句を含む命題には指示対象が関係するものだという見解を放棄しなければならない。後者が私の主張する行き方である。マイノングがしたように、成立しない対象を認め、そしてそれらが矛盾律に従うことを否定することにより、前者の行き方が取られることもある。これは、しかしながら、可能ならば避けられるべきである。同じ行き方を取る別の仕方が——私たちの目下の二者択一に関する限り——フレーゲによって採用されている。彼は定義によって純粋に規約的な指示対象を用意し、他のやり方では指示対象が一つもないような場合に備える。かくして「フランス王 the King of France」は零クラスを指示することになる」。

[26] Strawson, P. F., “On Referring” in: *Mind*, New Series, Vol. 59, p. 330.

あえてストローソンの主張に対して不満を言うなら、彼が想定している「あなた」がちょっと物知り過ぎたという点だ[27]。ストローソンは、フランス王はいない、つまり指示句と指示対象の対応がないから真であるか偽であるかの問題は生じないとする。これに対してラッセルの方のポイントは、指示句と指示対象の対応がなくても、そしてそれに言及しなくても、「現在のフランス王は禿である」を「唯一の項が性質 F を持ち、かつその項が性質 $\phi$ を持つ」という形式に分析すれば、真であるか偽であるかきちんと問うことができるという点にある。この操作の裏側には、排中律が適用できないような命題を残さないというラッセルの意図がある(cf. OD, p. 485)。ラッセルにとって「あらゆる有意義 significant な文は真であるか偽であるか、どちらかである[28] [29]」。その限りは、全て命題は真であるか偽であるかをきちんと問うことができるのでなければならない。ラッセルがストローソンの見解を受け入れられないわけもここにある。しかしその意図のためにラッセルは、指示句と指示対象の対応という難所を迂回できるコースを切り開かなければならなかったのである。

### 3.4. 指示の関係——それに纏わる問題とその解決

こうしてみると、POM 以来、ラッセルの命題観はずっと一貫している。ラッセルにとって、命題には基本的に二つの性質がある。第一に、命題は主張し、真であるか偽であるかである。第二に、命題は複合的である。指示句に付きまとうパズルは、言ってみれば、命題の基本的な性質が互いに影響し合って浮かび上がるだまし絵である。その生成と解消の過程を記述して締めくくることにする。

さて、命題は主張を持っており、主張は信念に基づいている。信念のごく身近にある様態は「近い未来における或る顕著な出来事に対する期待」である。この種の期待に「信念の本質的性格」が顕著に表れる(MPD, chap. 15, p. 183)。例えば、「ドアが風に吹かれるのを見て、バンと音がするのを期待する」(loc. cit.)。期待は当たることもあれば、当たらないこともある。言い換えれば、期待はそれを満足させる出来事と必ずしも対応しない。そうはいっても期待が出来事と全く無関係でないこともまた確かだ。それは、決して出来事でない何かを期待してはいない。期待される対象はまさに出来事として、ただし未来の出来事として思い描かれる。同じことは、命題と事実のあいだの関係に関しても言えよう。命題の内容はまさに事実として思惟される。こうして命題はそれを真たらしめる事実と必ずしも対応しないが、確かに事実に関わる。これが、何も指示しない指示句でさえその形式において指示している（事実に関わる）その関係のあり方である。

また、文は複合的であり、複数の語から成る。よって、文によって表現される命題、命題によって思惟される事実も複合的となる。文の全体は複合的で一つのものであるが、文の部分も一つのも

---

[27] この点に関して、ラッセルは「全宇宙の主権者は賢い the Ruler of the Universe is wise」という命題を引き合いに出し、注意を促している(cf. Russell, B., “Mr. Strawson on Referring” in: *Mind*, New Series, Vol. 66, p. 389)。

[28] “Mr. Strawson on Referring”, p. 388.

[29] 或る命題が真であるか偽であるなら、その命題は有意義であるとも言える。Cf. OD, pp. 483-4: 「いま『フランス王は禿である』を考えよう。……しかしこの句〔『フランス王』〕は……指示対象を持たないのは確かである。ここから或る人は、『フランス王は禿である』は無意味 nonsense に決まっていると思うだろう。しかしそれは無意味ではない。それ〔『フランス王は禿である』〕が偽であるのは明白だから」。

のである。例えば、「ソクラテスはプラトンを愛した Socrates loved Plato」という文はソクラテスという人を一つの構成要素として含んでいる(cf. MPD, chap. 13, p. 152)。さらに主語を「プラトンの師 the teacher of Plato」に変えると、文の部分も複合的で一つのものである。

このように命題が主張し、かつ複合的であるなら、それによって複数の部分から成る複合的な全体が事実として思惟される。かくして「現在のフランス王」や「円い四角」を主語とする命題は、その形式ゆえ、指示される全体を事実として思惟させる。

しかし、こうして指示される全体を全て対象として認めるなら、真でもなく偽でもない命題を認めざるを得なくなる。「『現在のフランス王は禿である』か『現在のフランス王は禿でない』かのどちらかが真でなければならない。しかし、もし私たちが禿であるものを数え上げ、それから禿でないものを数え上げても、どちらのリストのなかにも現在のフランス王は見つからない」(OD, p. 485)。また、「円い四角は円であり、かつ円でない」(OD, p. 483)、等々。

命題の分析についても、ここに「なぜそのようなリダクションをすることが是非とも必要 imperative であるか」という理由がある。ラッセルは「『事実』という言葉を、部分が構成している複合的な全体を表現するためにより、部分の分析された結合を表現するために使ったほうが都合がよい」と述べる(MPD, chap. 13, p. 151)。つまり、命題に関して言えば、それを全体に何が属するかに関する主張としてでなく、部分がどう結合するかに関する主張として理解せよ、ということだ。リダクションは、この方針に沿って、全ての命題に関して、命題の中では既成の複合的な全体を認めずに、そこに見出される全ての結合を問うべく、結合を顕にした形式に移し替える。指示句を主語とする命題がただ変項 $x$ だけについて、ただ存在者 $x$ だけを指示対象として主張されるとする命題解釈は、こうして生じた。そして既成の複合的な全体としての主語が消えたとき、指示句に付きまとうパズルも一緒に消えたのだ。

## おわりに

『私の哲学の発展』のお終い近くに「私は今も、真理は事実に対する或る関係に依存しており、事実は一般に非人間的 non-human であると考える」とある(MPD, chap. 17, p. 213)。宗教と数学が、非人間的なものに対するラッセルの憧れの始めだったが(MPD, chap. 1, p. 11)、しかしこの憧れは 15 歳のラッセルが哲学的にものを考え始めたその時から疑いと共にあった(cf. MPD, chap. 3)。それは「確実性 certainty」に対する彼の欲求から生じている(MPD, pp. 260-72)。本稿で私たちが主題とした「指示」の概念、そしてそれと関連して「真理」の定義、「信念」と「事実」の関係に関する見解は、ラッセルにとって、非人間的なものに対する憧れと、確実性に対する要求という相容れない二つの動機が 1905 年に行き当たった一つの落着点だったのではないかと思われる。本稿では扱えなかったが、「記述による知識」についてのラッセルの幾つかの言説は、1905 年の理論に基づいて非人間的なものについての知識を哲学的に弁護するという意図を含んでいるようだ[30]。また機会があれば論じてみたい。

[30] Cf. “Mr. Strawson on Referring”, p. 387.

## 文献

Russell, Bertrand. “On Denoting” in: *Mind*, New Series, Vol. 14, 1905, pp. 479-93.
———*The Principles of Mathematics*, 2nd ed., George Allen & Unwin Ltd., 1937.
———“Mr. Strawson on Referring” in: *Mind*, New Series, Vol. 66, pp. 385-9.
———*My Philosophical Development*, George Allen & Unwin Ltd., 1959.
Strawson, Peter Frederick. “On Referring” in: *Mind*, New Series, Vol. 59, pp. 320-44.
飯田隆.『論理哲学大全 I　論理と言語』，勁草書房，1987 年.
戸田山和久.「III　ラッセル」，飯田隆編,『哲学の歴史　第 11 巻　論理・数学・言語　【20 世紀 II】』，中央公論新社，2007 年，197-276 頁.
松阪陽一.「フレーゲの Gedanke とラッセルの Proposition——“On Denoting”の意義について」，野本和幸編,『科学哲学の展開 1　分析哲学の誕生　フレーゲ・ラッセル』，勁草書房，2008 年，257-76 頁.
三浦俊彦.『ラッセルのパラドックス——世界を読み換える哲学——』，岩波書店，2005 年.

# Russell on 'the Subject of Denotation', 1905

Eiji Inaoka

In "On Denoting" (1905), Bertrand Russell advocates: "a phrase," whether or not there is an entity that is the denotation, "is denoting solely in virtue of its form." This thesis results from Russell's conceptions of belief, facts and truth; that is, a belief is 'true,' when it has an appropriate relation with one or more facts. This paper examines the genesis of Russell's notion of denoting, that is to say, his understanding of the essential characteristic of a belief.